Ayuchi（あゆち）

[No.86/2020.5]

「Spring ephemeral」　坂本和也さん作

公益財団法人　愛銀教育文化財団

尾張旭市の棒の手

無二流

農民が主役となった民俗芸能

背丈より長い棒や太刀を手に、二～五人で向かい合って打ち合う武術的な民俗芸能は、「棒術」「棒遣い」などの名称で全国の各所に伝わり、愛知県や岐阜県では「棒の手」と呼ばれている。

そのルーツは、山伏が錫杖（金属製の杖）を持っていたように、おそらくは修験道の護身術が原型だろう。それが農村に伝わり、戦国時代には農民の自衛手段となり、やがては五穀豊穣を祈る神事の芸能となっていったのだと推測される。

濃尾平野など肥沃な土地を抱えていたせいか、棒の手は特に愛知県が盛んで、尾張地区（尾張旭市、名古屋市、長久手市、春日井市、小牧市など）、三河地区（豊田市など）を合わせて十四の保存会、二十の流派が伝統を受け継いで活動を続けている。

その中で、今回注目したのは尾張旭市の棒の手だ。

五流派が競う尾張旭市

尾張旭市の棒の手は昭和三十三年に愛知県無形文化財に指定され、昭和五十一年には愛知県無形民俗文化財に再指定された。市内のあちらこちらに棒の手に関係するモニュメントが見受けられるのも、棒の手と市民との距離の近さを思わせる。

それは愛知県の中で最多の五つの流派、総勢約七百人という規模からも伺えるというものだ。

五流派は、「無二流」「検藤流」「東軍流」「直心我流」「直師夢想東軍流」だ。

一つの原型から五つの流派が派生したのかと思いきや、それぞれに異なる成り立ちを持ち、演技も似ているようで、実は異なる。それだけ、「自分達の棒の手」として地域が大切に守り伝えてきたのだろう。

いずれも五穀豊穣を願って寺社に奉納し、祭りのイベントとして見事な〝型〟を見せている。観客は、その勇姿と演技の迫力に、ヤンヤと拍手を送り、湧きかえるのだ。

尾張旭市の棒の手 五流派

無二流（むにりゅう）

新居地区に伝わる。1361年に新居村を開拓した水野又太郎が伝えた。型や姿勢に厳しく、特に足型が独特。掛け声を長くのばす。多度神社に奉納。

検藤流（けんとうりゅう）

稲葉地区に伝わる。毛受周平が1811年に開いた。足を踏ん張るのが基本。華やかな動きも見どころ。一之御前神社に奉納。

東軍流（とうぐんりゅう）

印場地区北部に伝わる。伝昌院伝寿が1684年に開いた。攻めを主体とした演技が多く、真剣を使ったリアルな演技は迫力。渋川神社に奉納。

直心我流（じきしんがりゅう）

印場地区北部に伝わる。八木弥市郎博章が1714年に開いた。攻撃的で早業が特徴。演技時間や掛け声も短い。渋川神社に奉納。

直師夢想東軍流（じきしむそうとうぐんりゅう）

印場地区南部に伝わる。森下理右衛門が1821年に開いた。後ろ押しが特徴。演技時間も短い。股引が紺色。渋川神社に奉納。

無二流を訪ねて

尾張旭市の棒の手を代表して、無二流保存会の会長、副会長から話を伺った。無二流は約四百人の会員を擁し、七つの分会を持つ尾張旭市の最大流派だ。

「無二流は、開祖の水野又太郎が南北朝時代に吉野の山で修業し、その時に修験道の技を得て、こちらに帰ってきて配下の農民に伝えたものです」

と、会長の若杉正人さん。

無二流の演技の特徴は足にある。前に出す足の膝がまっすぐに伸びているのだ。

無二流棒の手保存会
会長　若杉正人さん

後ろに重心を置く、どちらかと言うと守りの形だ。ほかの流派では、一方が攻め、一方が守るという形はあるが、対峙した両方が守る形というのは珍しい。

「姿勢は低い方がいい。師匠や先輩達に『もっと下げろ、もっと下げろ』と言われます（笑）。地面に着くぐらい低い姿勢になることもあります」

とは、副会長の若杉雅康さんだ。

「それに、棒に自分が隠れるぐらいでないといけない」（会長）

無二流のホームページを覗くと、十代家元のはしがきの中にこんな文言がある。

一本の筋の上で正しい姿勢
一本の棒　正しい形

…無二流の奥義へと導く言葉だ。

無二流棒の手保存会
副会長　若杉雅康さん

棒の手が持つ2面性

棒の手に「表」と「花棒」があるのをご存じだろうか。
「表」とは、棒と太刀で演じる、神事的要素の強いもの。脈々と受け継がれてきた本来の棒の手の形だ。社寺への奉納で行われる。
「花棒」は、真剣や長刀といった〝キレモノ〟も使い、祭りやイベントで華やかに演じる。明治時代以降に観客を意識して発展した〝見せる棒〟だ。

守ること、変わること

「無二流は一つ一つの所作をきちんと決めていく。だから、あまり演技が速すぎると決まらない。逆に、東軍流などは流れがあって、うちよりスピードが速い。それぞれの流派で千差万別です」（会長）

「動きがあって羨ましい部分もあります。よその分会や流派を見て、いいところは盗んでいこうかと（笑）」（副会長）

門外不出だった棒の手の技も、さすがに現代はオープンになって、教え合うこともあるのだとか。

「所作の組み合わせですから、多くのバリエーションがあり、新しい組み合わせが増えていくのもいいと思います」（会長）

その柔軟さが棒の手を今日に生かしているのかもしれない。

さらに、

「形はそのまま残っていきますが、それをする意義というのは時代によって変わっていくのではないでしょうか。棒の手も災害や戦争を乗り越えて残って来たのには意味があると思います。現代のコミュニティを作っていく上で棒の手には役割があり、それを地域の力にしていくのが大切なんだと思います」（会長）

地域の将来へとつないでいく

ただ古いものを残すだけではないのだ。

棒の手の練習は祭礼（十月）の二～三週間前から集中して行うという。なかなか上達しないと、神社での奉納では演技ができず、町内巡りに留まることになるから、みんな一生懸命練習するのだ。

「棒の手を通して子供からお父さん、お祖父さんの年代までが一緒につながれる。地域の横のつながりも生まれます。無二流の歴史を守っていく役目とともに、尾張旭の将来へとつないでいくことは非常にやりがいがあります」（会長）

白い封紙はケガがないようにと、身体の腰に付けたり、棒や太刀、真剣などの武具に付けるおまじないだ。
と同時に、棒が神の依り代であり、演者が神に仕える人であることを示す。

「棒を身近に置けば、神が近くに降臨する」

「若い頃は何気なくやっていたのですが、だんだん歴史的なことを知り、六五〇年以上続いている歴史の一端に携わらせてもらっているんだなと実感しています。演技と並行して、歴史や文化の面でも棒の手を伝えていくことが必要ですね」（副会長）

最後に若杉会長曰く、

「祭りの当日の朝、夜が明けて、鉄砲の音が鳴る。棒の手の衣裳を着る。だんだん高揚していきます。十月の青い空を見上げると、『お祭りだ。さぁ、やるぞ！』という気持ちになるんですよ（笑）。その気持ちを新しい住民の皆さんにも経験していただきたい。それが尾張旭市への愛情につながっていくのではないかと思っています」

さて、それぞれの流派と地区の結びつきに思いを馳せながら、秋の祭礼を待つとしようか。今年は尾張旭市の市制五〇周年に当たり、五流派が一堂に会する「警固」の年だ（予定）。これは見逃せない！

尾張旭市の棒の手が見られる！

毎年10月第2日曜日開催
（一部の年を除く）

- 多度神社秋季大祭：無二流
- 渋川神社秋祭り：直心我流、東軍流、直師夢想東軍流
- 一之御前神社秋祭り：検藤流

- 尾張旭市民祭（城山公園）：献馬（馬の塔）を棒の手隊、鉄砲隊などが警固（警護）し、行進したり、演技を披露したりする。

※開催予定などは尾張旭市のホームページで確認してください。

https://www.city.owariasahi.lg.jp/kurasi/kyouiku/bunka/bunkazai/siteibunkazai.html

■取材・撮影協力、資料および写真提供／無二流棒の手保存会、尾張旭市教育委員会

People

このエリアにとって無くてはならないテレビ局でありたい。

内田　優

（東海テレビ放送 代表取締役会長／愛銀教育文化財団 理事）

■内田　優 プロフィール

1950年、津島市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。1973年、中日新聞社に入社。社会部を中心に記者生活25年。1985年から5年間は運動部でドラゴンズを担当し、星野仙一監督の初優勝に立ち会う。1998年に東海テレビ放送へ。2005年に取締役となり、以後、常務取締役、専務取締役を歴任して、2013年に代表取締役社長に就任。2019年から現職。仏像や庭園鑑賞は学生時代からの趣味。スポーツ全般を見るが、特に関心が深いのはラグビーと野球。「不易流行」「疾風に勁草を知る」を座右の銘に、放送界の新たな方向性を切り拓く。

ここ十年ぐらいでテレビをとりまく環境は本当に変わりました。テレビ広告費とインターネット広告費がついに逆転しましたし、テレビ放送が同時にインターネットで流れる時代になりました。NHKは東京で作った番組を全国にインターネットで流していきます。ただ、それでは東京のものしか見られない。民放も、東京のキー局の放送がネットで全国に流れると、ローカル局の存在は一体どうなるんだろうか、という問題があります。名古屋もそういう意味ではローカルですから、東海テレビもいかにして存在感を高めていくのかが大きな課題です。

経営のかじ取りは大切ですが、テレビ局はやはり番組制作で特徴を出していかなければいけません。どのような番組を作り、放送し、皆さんに信頼され、喜んでいただけるか。

東海テレビの特徴といえば、一つはスポーツ分野です。野球の中日ドラゴンズ戦を長年放送しており、現在も年間三十試合近くを放送しています。これは大きな財産だと思っています。それから名古屋ウィメンズマラソンの中継や、男女のゴルフトーナメントも放送していますので、在名の中ではかなり突出して多彩なスポーツコンテンツを皆さんに提供できているのではないでしょうか。

もう一つはドキュメンタリーです。私が東海テレビに来た二十年ほど前は、ドキュメンタリーは深夜しか放送していなかったんですよ。一年も二年もかけて一生懸命作っても、夜中ですから見る人がほとんどいない。そこで、何回か昼間に放送するようにし、今では定着してきました。

とは言っても、テレビではこのエリアの人にしか見ていただけない。取り扱っているテーマの多くは、どこのエリアにも共通する、時代が抱えた問題です。もっと多くの人に見てもらうことができないかということで、映画化に踏み切りました。すでに十本以上を映画にして、大きな劇場ではありませんが、各地で上映しています。

三年前の『人生フルーツ』というドキュメント映画は約三十万人に見ていただきました。それが刺激になって、各地の民放がドキュメンタリーの映画化に挑戦する流れが出てきています。そういう活動が認められて、一昨年に菊池寛賞をいただいたりもしました。

また、全国ネットのドラマをレギュラーで制作しているのは、東海地区では当社だけで、毎週土曜日の夜に放送しているんですが、だいたい二か月単位なので、制作も費用もけっこう大変なんです（笑）。

私は折に触れ「不易流行」という言葉を使っています。ずっとやってきたことをのほほんと守っていくのではなく、大事なものはきちんと受け継ぎ、変えていくものは思い切って変えていく。伝統と因習は違います。伝統は守る価値がある深いもので、その意味を理解して次につなげていくもの。漫然とやっているものは伝統ではない。そこは変えなければいけない――と、そんな思いでテレビ文化を発信していきたいですね。

東海テレビは二〇一八年に開局六〇周年を迎え、「ふるさとイチバン！東海テレビ」という、敢えてアナログ的なスローガンを掲げました。それは、このエリアにとって無くてはならないテレビ局でありたい、ここに暮らしている皆さんと常に一緒にいたいという、強いメッセージを込めています。「寄り添う」なんていうレベルではなく、「一体となる」という決意です。

そういう意味で、地域への貢献も大切にしており、東海テレビ文化賞や、障がい者の方々に光を当てる東海テレビひまわり賞、東海テレビ福祉文化事業団の福祉車両『愛の鈴号』贈呈など、先輩達がやってきたことをしっかり受け継いでいます。

ところで、東海テレビのチャンネルは1番です。これは珍しいんですよ。日本全国、ほとんど1番はNHKですから。

チャンネルは国から割り振られます。戦後、この地域では占領軍が1番を使っていました。NHKは3番。その後、占領軍が撤退して1番が空いたので、それを東海テレビに割り当てたと聞いています。デジタルになった時に、NHKを1番にという話もあったようですが、東海テレビが1番を守り抜いたとか（笑）。

東京に行って1番をつけるとNHKがかかってしまうじゃないですか。それが名古屋に戻ってきて1番をつけると東海テレビになる。何となくホッとする。そういう気持ちを大事にしていきたい。

だからこそ、1番へのこだわりはこれからもしっかり持っていきたい。それは勝ち負けのナンバーワンではありません。それこそ「ふるさとイチバン！」です。そして地域の皆さんにずっと可愛がっていただきたいと願っています。―談―

熱い。とにかく熱いのだ。松井真人（まついまさと）という俳優は。それでいて、どこか冷静で、演技の細部までちゃんと計算している。

本格的に演劇を始めたのは、大学の演劇部でのこと。出演二本目で主役を獲得。毎日何時間も続くハードな練習もこなし、「こんなに面白いのか！」とのめり込む。

「でも全然ダメでした。練習の効率が悪い。方法論がしっかりしていない。死ぬほど練習したのに、結果は酷評でした」

悔しくて、自分でもびっくりするぐらい泣いた。そして、演劇の道に進むことを決意する。十八歳の夏。

「その後、先輩の佃典彦（つくだのりひこ）さんに、芝居で食べていくにはどうしたらいいかと聞いたら、『いい作家か、いい演出家を探しなさい』と言われたんですよ」

百本以上の芝居に目を通し、一番面白いと思ったのが鹿目由紀（かのめゆき）さんの演出だった。そこで彼女が主宰する劇団あおきりみかんの旗揚げに参加。今では立派な看板俳優だ。

松井さんの言葉で印象的だったのは、「演劇では〝私とあなたの間〟にあるのが芸術だと思います。僕は、少なくてもそう思って演劇を創りたい」

〝あなた〟とは、共演者であり、スタッフであり、観客でもあるのだろう。演劇はコミュニケーション芸術だと言われる所以だ。ところで、同じ舞台でも、昨日と今日では違う？

「北村想（きたむらそう）さんの言葉で、『新しく同じである』というのがすごく好きで。同じことをやっているけれど、それは新しいんです。だから、よく稽古場で『昨日の僕と芝居やってない？』って言うんです（笑）」

驚いたのは、松井さんの作品へのアプローチ方法だ。

台本を手にしたら、言葉を、行動を、背景を、徹底的に調べる。必要なら取材もする。作品の時代は？　場所は？　どんな気候？　隣りの家までの距離は？　移動手段は？…どんどん思考が走り出す。それは脳科学（！）の分野にまで及ぶ。「大きな感動が脳のシナプスを…」。理論派である。そして演劇の話が止まらない。

「実は、働いているというより、遊んでいるみたいな感じ。楽しいです（笑）」

永遠の演劇少年、ここに在り。

※北村想さん、佃典彦さん、鹿目由紀さんは、いずれも名古屋をベースとする劇作家・演出家。

理論や取材の積み重ねを武器に、芸術家として最高の作品づくりに臨む。

俳優・演出家・プロデューサー

松井真人さん

第29回助成（個人）

名城大学の劇団獅子に入部し、1996年から俳優として活動。1998年、劇団あおきりみかんの旗揚げに参加。以降、愛知県内および全国で公演。主演作品にて池袋シアターグリーンフェスティバル大賞、名古屋市民芸術祭賞など受賞多数。劇団あおきりみかんの全公演に出演し、客演も多い。NHK「中学生日記」などTVドラマやCMでも活躍中。学校演劇やワークショップでの指導も行い、演劇文化を次世代へとつないでいく。また、今後は海外での公演もめざす。8〜10月には名古屋・東京で劇団あおきりみかんのツアーを予定。

アンクロンとは、インドネシアの竹製民俗楽器だ。横に振ったり、叩いたり。カラコロカララ…と、軽やかな響きが心地よい。一つで一音。いくつものアンクロンが鳴って、音階が紡ぎ出されていく。

そんな楽器に魅了された人々がいる。名古屋を拠点に活動するLEEO（リーオ）アンクロンチームだ。愛知万博のイベントで演奏した有志が集い、翌年に結成した。メンバーは約二十名。

「インドネシア製の竹の楽器がだんだん日本の気候に馴染んでくるんです。生きているみたいでしょ（笑）」

と、メンバーの阿知波純子（あちわすみこ）さん。なるほど、音色の味わいも自然素材ならではか。

楽譜は数字譜で、自分の番号で振ると、全体で曲が完成する。

「一拍のところを一拍半ぐらい鳴らすことによって、音が重なり、響き合います。何十もの音が和音になっていく。演奏している時は、音の中に包み込まれて、それはもう気持ちが癒されるんですよ」

月六回の練習、月に一回のペースで演奏に出かけるというハードな活動ぶり。行き先は幼稚園や保育園、小学校、高齢者施設、そして国際交流のイベントへ。二〇一五年にはミラノ万博へ駆けつけた。その行動力に脱帽！　演奏だけでなく、観客にアンクロンを渡し、その場で演奏体験をしてもらうワークショップも好評だ。

このチームの面白い点は、代表者がいないことだ。イベントは『バンマス制度』で順番に運営役を担っていく。さらに、譜面を作る人、パンフレットを作る人、出演機会を見つける人、等々。みんなが特技（?!）を生かして自分の役割をこなしていく。

「それは楽器に由来していると思うんです。〝一人一音で等しい〟。誰が欠けても成り立ちません」

だからこそ「自分に責任を持ち、相手を信頼する」。

アンクロンは二〇一〇年にユネスコの無形文化遺産に認定された。LEEOの夢も、インドネシアで地元の人々と共演したい、また万博で演奏したい、ニューヨークのような大舞台にも行きたい…と膨らむ。

「音楽に国境はないですし、人と人がつながるところが一番いいですね」

日本ではまだアンクロン人口は少ない。「ただ今メンバー募集中！」とのことだ。

一人一音でつないでいく、自然素材の音色と世界の人々。

世界民族楽器オーケストラ

LEEO アンクロンチーム

第29回助成（団体）

愛知万博後の2006年にLEEOを結成。現在、アンクロンチームとスチールパンチームが活動を続けている。アンクロンチームのメンバーは、愛知県内はもとより、三重県や静岡県からも参加。基本的には指導者を置かず、自分達で工夫を重ねながら日々研鑽を積む。名古屋を中心に各地の様々なイベントに出演。公共施設や教育機関にも出向き、アンクロンの歴史や演奏方法などを紹介。2015年に自主公演を開催。インドネシアフェスティバル名古屋など国際交流イベントへの参加も積極的に行い、インドネシア大使館から感謝状も贈られている。

仲間達の近況メモ

2020年 1月

●**中部産業遺産研究会**　第30回助成・団体
第15回パネル展と講演会「ものづくり中部の革新者たち」
〔名古屋都市センター（名古屋市中区）〕

●**名知聡子さん（現代絵画）**　第27回助成・個人
展覧会「化現の光　KEGEN no HIKARI」に出展
〔アートラボあいち（名古屋市中区）〕

●**改組 新 第6回日展 東海展に出展**
〔愛知県美術館ギャラリー（名古屋市東区）〕
新野素子さん（染色）　第2回助成・個人
大橋敏彦さん（金工）　第3回助成・個人

●**西村一成さん（絵画制作）**　第20回助成・個人
「PAINTING THE JAPANESE BLUES INTRODUCING ISSE I NISHIMURA」開催
〔Cavin-Morriis Gallery（アメリカ・ニューヨーク）〕

2020年 2月

●**NPO 法人てほへ（地域文化の伝承と再生）**　第23回助成・団体
志多ら「たすき」名古屋公演
〔日本特殊陶業市民会館（名古屋市中区）〕

●**加藤佳代子さん（ソプラノ歌手）**　第20回助成・個人
CD 発売記念加藤佳代子ソプラノリサイタル「An Evening Hymn 夕べの賛歌〜リュートと一体化する16世紀歌唱の妙技〜
〔電気文化会館 ザ・コンサートホール（名古屋市中区）〕
〔東京オペラシティ近江楽堂（東京都新宿区）〕

●**劇団名芸**　第30回助成・団体
第76回劇団名芸公演「千石がゆく」
〔劇団名芸アトリエ（名古屋市名東区）〕

●**ミッドジャパン音の芸術祭実行委員会**　第30回助成・団体
ミッドジャパン音の芸術祭
ーどっぷり音に浸かる3日間、日本の真ん中で音泉を楽しむー
〔愛知県立芸術大学室内楽ホール（長久手市）他〕

2020年 3月

●**視覚障碍者の情報環境を考える会ボイス・ケイン**
第27回助成・団体
〈東彰治 追悼公演〉ボイス・ケイン朗読劇「外郎売物語」
〔名古屋市港文化小劇場〕

●**西村一成さん（絵画制作）**　第20回助成・個人
西村一成展〔京都場／ KYOTOba（京都市）〕
西村一成新作展　AT A CROSSROADS
〔ギャルリー宮脇（京都市）〕

●**愛知の工芸2020に出展〔古川美術館（名古屋市千種区）〕**
新野素子さん（染色）　第2回助成・個人
大橋敏彦さん（金工）　第3回助成・個人
森　克徳さん（陶芸）　第4回助成・個人

●**坂本和也さん（絵画制作）**　第30回助成・個人
個展「Spring ephemeral」
〔nichido contemporary art（東京都中央区）〕

書籍・会報誌等の発行

●**守山リス研究会**　第19回助成・団体
12〜4月…「リス研通信」NO.4898〜4997発行

●**はんだ郷土史研究会**　第19回助成・団体
12月…「知多半島郷土史往来」第6号発行
1・3月…「はんだ郷土史だより」第88・89号発行

●**江南郷土史研究会**　第3回助成・団体
1〜4月…「江南郷土史研究会会報」491〜494号発行

●**小牧市文芸協会**　第2回助成・団体
1〜4月…郷土文芸誌「駒来」第576〜579号発行

●**まつり同好会**　第25回助成・団体
1・3月…「まつり通信」605・606号発行

●**守山郷土史研究会**　第1回助成・団体
1月…「もりやま」第39号発行

●**野田史料館**　第1回助成・団体
1月…「野田史料館報」第156号発行

●**愛知歴史研究会**　第7回助成・団体
2・4月…「あいち歴研会誌」第163・164号発行

●**名古屋郷土文化会**　第7回助成・団体
2月…「郷土文化」第74巻第2号発行

●**名古屋民俗研究会**　第8回助成・団体
3月…「名古屋民俗」61号発行
名古屋民俗叢書5「東海の仏教民俗」発行

●**長久手市郷土史研究会**　第13回助成・団体
3月…「胡牀石」第55号発行

※ここには事務局に入った連絡分をまとめて掲載しました。連絡状況によって、掲載のタイミングがずれる場合があります。また、事前のご案内を基にご紹介しているものもあり、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により活動が中止となっていた場合は、ご容赦ください。今後も皆さんの活動状況をお知らせいただければ幸いです。

表紙作品

「Spring ephemeral」（部分）
1818×4546mm
キャンバス、油彩
坂本和也さん作（第30回助成）

●作者の言葉

春先の短い期間に開花し、1年のほとんどを地中で過ごす植物群、「スプリングエフェメラル」をモチーフにしています。他の植物との競争を避けるためにライフサイクルに時間差をつけることで繁殖、生存しようとするこれらの花々に焦点をあて、自己の潜在意識や精神状態、葛藤を可視化させるよう一筆一筆を重ねています。

編集後記

今回の取材で出会った言葉の中から三つ紹介します。

「形はそのまま残っていきますが、それをする意義というのは時代によって変わっていくのではないでしょうか」。

「不易流行＝大事なものはきちんと受け継ぎ、変えていくものは思い切って変えていく」。

「新しく同じである＝同じことをやっているけれど、それは新しい」。

それぞれにニュアンスは異なりますが、頑なに守るのではなく、そこから新しいものを創造していく力強さを感じました。え？その言葉はどこにあるかですって？どうぞ本文を今一度読んで、見つけてください。

甲子園はもう夢じゃない。
臨機応変、考える野球で強豪を崩す！

硬式野球部
愛知県立西尾東高等学校
第30回援助（高校生）

1977年から夏の県大会に参加。OBに元プロ野球中日ドラゴンズの岩瀬仁紀さんがいる。寺澤康明先生が監督を務めて14年目。部長の島田泰嘉先生と二人体制で野球部を率いる。三河地区では優勝経験も重ね、2016年には夏の全国高等学校野球選手権大会愛知大会でベスト4。2018年には、同100回記念大会東愛知大会で準優勝、秋の愛知県高等学校野球選手権大会でベスト4。校長の馬場茂先生（大府高校の野球部監督として甲子園出場）も「甲子園という目標に向かって、ひたむきに取り組む姿には刺激を受けます」とエールを送る。

校長の馬場 茂先生　監督の寺澤康明先生

キャプテンの永友悠雅さん

西尾東高校の野球部は今、「愛知県の公立高校で甲子園に最も近い」と言われている。野球部をめざして入学する生徒も増えてきた。部員数は約八十名。公立高校で一番野球部員が多い学校でもある。

中心選手にはさぞ厳しい練習を課しているのだろうと思ったら、普段の練習メニューは全員ほぼ同じ内容だという。

「生徒達は勉強も頑張っているので、効率的に練習しながら、思い切り好きな野球をやらせたいというのが第一です」

と、自身もOBの寺澤康明監督。しかも、けっこう部員の自主性に任せているのだ。

「自分達で考えてやれるように、わざと仕向けています。私がいてもいなくても、手を抜かず、一生懸命やっていますよ」

予算が少ない、練習時間が短いなど、公立ならではの悩みも多いが、とにかく広いグラウンドで、のびのびと投げる、打つ、走る！昨年導入したピッチングマシンで効率もさらにアップできそうだ。

西尾東は打のチーム？　投のチーム？

「あまり決めていないです。対戦相手ごとに、『勝つためにはどうするか』と考え、しっかり対策を練っていきます」

柔軟性があって、途中で作戦を変えていくこともできるわけだ。

「相手にとっては嫌な感じ（笑）。引き出しがいっぱいある、バランス型のチームに仕上げていきたいですね」

一昨年の一〇〇回記念大会（愛知県で二校出場）では東愛知大会で準優勝。甲子園にあと一歩のところまで迫ったが、強豪私立の壁は厚い。

「崩していくのはなかなか難しいですが、大会ごとに一つは爪痕を残してやろうと（笑）。一つ崩せば、また次が見えてきます」

今年度のキャプテンを担うのは、三年生の永友悠雅さん。

「勝つと楽しいです（笑）。昨年の秋はなかなか勝てなくて苦しかったです。新型コロナの影響で春の大会が中止になった時に、みんなと話し合い、夏に向けて、いつ何があってもいいように、モチベーションを高く保っていこうと気持ちを切り替えました」

そして、「目標は甲子園出場です！」とキッパリ。実現できそうな目標は強い。ひたむきな高校野球って、やはりいいな。

※新型コロナウイルスの影響で部活動を自粛する以前の3月に取材。

第31回（令和2年度）

助成対象者募集

募集期間 5月15日（金）～6月30日（火）

募集要項

一般助成

●対象

愛知県内を基盤に、教育及び文化活動の維持発展に努力し、地道に、継続的、独創的な活動を行っている個人又は団体で、次の条件を満たすものとします。

①行政機関（国又は地方公共団体）から助成を受けていないこと。
※助成が反復・継続ではない場合、助成金額が少額の場合はこの限りではありません。
②営利を目的としないこと。
（注）「教育活動」とは社会教育活動（スポーツを含む）を主体とします。「文化活動」とは音楽、演劇、舞踊、伝統芸能、美術、工芸、文芸、郷土史研究等の分野とします。

●応募または推薦

原則として、個人又は団体からの直接申請としますが、第三者からの推薦申請も認めます。

●助成金の額及び件数

個人に対し、助成金は1件につき30万円を8名以内。団体は1件につき40万円を10団体以内。

●助成金給付の決定及び通知

給付の決定は選考委員会の選考審査を経て、理事長が決定します。結果は書面にて申請者に通知します。

●助成金給付の時期

助成金は決定通知後、1ヶ月以内に給付します。

●申請方法

◇申請用紙は財団事務局または最寄りの愛知銀行窓口にお尋ねください。ホームページからもダウンロードできます。
◇所定の申請書に記入のうえ、5月15日（金）から6月30日（火）までに当財団へ提出してください。ただし郵送の場合は、当日の消印まで有効とします。

高校生への援助

●対象

愛知県内の高等学校における文化及び体育活動。

●援助金の額および件数

援助金は25万円単位で、文化・体育で各150万円以内。

●申請方法

「文化活動」においては愛知県高等学校文化連盟、「体育活動」においては愛知県高等学校体育連盟の会長推薦が必要です。
※その他、募集期間等については一般助成と同様です。

※応募の際の申請書並びに添付資料はご返却いたしませんのでご了承願います。
※応募された方の個人情報につきましては、当財団事業にて使用させていただき、当財団の個人情報保護方針に基づき適正に管理します。

お問合わせ先

〒460-8678 名古屋市中区栄三丁目14番12号（愛知銀行本店内）
公益財団法人 愛銀教育文化財団 事務局
☎(052)262-9601 ダイヤルイン
https://www.aichibank.co.jp/company/csr/foundation/

Ayuchi

あゆち第86号●2020年5月
発行：公益財団法人愛銀教育文化財団
〒460-8678 名古屋市中区栄三丁目14番12号
愛知銀行本店内 ☎(052) 251-3211（代）